

# 炎の恋がしたい！ 女優という仕事を通して、いくつももの恋をした。

インタビュー／たかのてるみ  
撮影／中根静男

フランス映画には、愛を貫き、その愛が破れた時には次の愛を捕えて生きる、という様な毅然とした女性が描かれることが多い。そして映画の中のフランス女性はいつも大人の女である。彼女たちのいさぎよい恋の仕方、生き方が描かれるフランス映画は、いつも私たちのお手本だ。イザベル・アジャニーニやソフィー・マルソーに次いでフランスを代表する女優として注目されているエマニュエル・ベアール、彼女もまた、女優という仕事を通して、いろいろな女性になりきって、多くの恋を経験して来たわけだ。

「内気な性格を少しでも外に向けようと、女優という仕事を選んだの」と言うエマニュエル・ベアールは、その特別な仕事を通して、様々な女性の人生をかい間見たり、演じ切る事により、広い視野と、社会性を身につけることが出来、今や自信を持って人前に立っている様な、自立した女性になったと語る。

とにか、自分以外の人間になりきって、別の人生を経験出来るから、この仕事は最高だ、と彼女は言う。

イヴ・モンタンやダニエル・オトウイユと共演を果たしたデビュー作『愛と宿命の泉』で、妖精の様な、この世のものとも思われない程の美少女として登場した彼女は、その後はアメリカ映画にも進出して、『天使とデーブ』では、本当に背中に羽の生えた、天使になった。そして、最新作、現在公開中の『優しく愛して』では、高級コールガールに……

しかし、どんな役を演じて、彼女の清らかであどけない少女の様な美しさは、変らない。そして、いつも恋する女であるところも、変らない。今回は、ダニエル・オトウイユ

演じるところの、浮気が高くて妻に逃げられるダメ男と、コールガールという身分を越えて、純粋に恋をする。逃げた妻は妻で、すぐに新しいパートナーを探し、夫とは正反対の、うんと年上で社会的地位もお金も、そして包容力もいっぱいある男と一緒にいるが、ダメな夫にもコールガールである新しい恋人が出来ることを、元の妻は喜んで、ダブル・カット、つまりは四人の共同生活が始まったりする。時によっては、前の夫婦がヨリを戻して、四人の関係がバラバラになったりもして、エマニュエル・ベアール演じるコール・ガ

ールが、四人の関係を結ぶ、キュービッド役になっているというわけだ。こんな関係も自立しているという大人だから、フランスだからこそと、観る者をうらやましがらせる。

「フランスの女性は、そういう点で特別進んでいる様に思われがちだけれど、そうでもないわ。サバサバしていない人だって、大勢いる。恋愛による苦しみ悲しみ、別離に対して苦悩し迷うのは、女性なら誰しも同じだと思う。でも、確かに女性のほうが、男性よりも、自分自身に正直に生きていることは事実ね」

と、ベアールは言う。

「フランスでは、男性は結婚したいと思える女性と出会うまで、何人も女性を追いかけて、いくつもの恋をする。それでいいと思うんです。でも、結婚した後は自分が選んだ女を大切に。こういう男が一番素敵だと、私は思っています。だから、『優しく愛して』の主人公のダメ男の様な男を、個人的には私は絶対に好きになれないんです。甘えた幼稚な男は二方手ですね」

一見、幼さが漂い、成熟し切って

いないところが、日本人受けして、洋酒会社のブランドのCFにも起用され、人気が高まっている彼女ではあるが、日本のアイドル・スターとは一線を画し、自分の意見はしっかりと持っている、大人である。

「男性は顔じゃなく、第一に知性。女性のほうが早く成熟しますから、年上の男性が丁度いいですね。私は大人の男としか恋愛したくないな」

今回の映画の中でも、ダメな夫に対して妻が選ぶ第二の男は、対照的とも言える、寛大で包容力のある体の大きな、うんと年上の男。アノテのタイプなら理想的かな？ との質問には、やさし過ぎる男もダメ、と答えるベアール。

「コン・ヨウが効いていなくっちゃ」と、中々に難しい。

「私はやっぱり女優だから、これからいろいろな女性になりきって恋もするし、人生も歩んでいく。演技をしながら成長して行きたいですね。その中で大人の女とは、男とは、大人の恋とはどういふものか、見極めて行けたら素晴らしいと思う。何と言っても、私は女優なのだから」



Emmanuelle Béart

PROFILE  
1965年、サントロペに生まれる。ポツ  
ツシンガーの父、モデルであった母  
を持つ。映画『愛と宿命の泉』で一躍ス  
ターダムに。実力、人気とも現在、フラ  
ンスでトップの座を得ている。ハリウ  
ッドに進出もめざす、国際派フランス女  
としても注目の的。